
＜批評＞ 伊藤友久「自由大学運動の起因と崇高な理念
－生涯学習発祥地としての責務－」

（『長野県立歴史館研究紀要』第 27 号、2021 年）

山野 晴雄

2021 年は上田自由大学(創設時は信濃自由大学)が 1921 年に創設されてから 100 年の節目の年に当たる。その節目の年に地元長野県から伊藤友久氏によって「自由大学運動の起因と崇高な理念－生涯学習発祥地としての責務－」(『長野県立歴史館研究紀要』第 27 号、2021 年)と題する論文が発表された。しかし、この論文には、いくつか看過できない問題点がある。そこで伊藤論文の内容を紹介しつつ、問題点を指摘しておきたい。

この伊藤論文は、伊藤氏が 18 ～ 20 年前に発表した 3 つの論文、「須山賢逸の関連史料－信南自由大学 発起人と画家石井柏亭との接点－」(『信濃』第 53 巻第 2 号、2001 年 2 月)、「須山賢逸の関連史料(二)－信南自由大学の創立と理念－」(『信濃』第 53 巻第 9 号、2001 年 9 月)、「須山賢逸の関連史料(三)－郡青から信南自由大学へ、そして信濃自由大学との係わり－」(『信濃』第 55 巻第 7 号、2003 年 7 月)を再構成したものである。

伊藤氏は、「自由大学運動の本質を探る上で、創設に関わった当事者が発し残した語句や講師らと交わした書簡類も、新たに発見されてきている現状で、それらを既存史料の中に位置づけ補完を目指しながら創設 当時の理念を論じなければならない」という課題意識のもとに、主に信南自由大学(のち伊那自由大学)の創設にいたる状況や理念、社会主義青年運動との関係を明らかにしたものである。

一、「不名誉な烙印を押されてしまった自由大学の復権」では、小平千文氏が「農村教育研究会と信濃農村自由大学－その設立と思想－」(『長野県立歴史館研究紀要』第 1 号、1995 年)で、信濃農村自由大学との比較の中で、信濃自由大学に始まる自由大学では「官に組することを拒否する思想や組織原則をもって」と指摘したことに対して、信濃自由大学や信南自由大学の「創立時の趣旨書からは、官権との対決を想定した過激思想や組織原則が持ち込まれたとは思えない」とし、「不名誉な烙印を押した」と批判している。

二、「信濃自由大学から信南自由大学へ」では、信濃自由大学の創設には山越脩蔵が土田杏村を講師とする哲学講習会を開催し、自由大学の設立構想に主導的な役割を持っていたこと、一方、信南自由大学の創立においては須山賢逸がその役割を担ったとする。そして、1923 年春に須山らが上田の猪坂直一を訪ねて、自由大学の趣旨や開講時の状況を聞いたさい、「自由大学の趣旨に対する考え方の相違から激論になった」とする。しかし、その後の書簡のやり取りでは、「依頼講師の日程調整や運営に対する助言、LYL(検挙)事件後の情報など、むしろ、共に自由大学の崇高な理念を現実のものにしようとしていたことが読み取れる」としている。ただ、信濃自由大学が「信濃黎明会との共存の道を選んだ」ことは、「信濃黎明会が信濃自由大学の母体との判断材料とされ」、そのことが「すべての自由大学は反体制組織を形成し、その思想を広めることで、やがては現体制転覆を謀る一翼を担う反乱分子の育成を目的に創立したとの解釈を甘んじて受けるに至った」とする。

三、「信南自由大学の理念と新出史料」では、信南自由大学の設立の経過を叙述し、1923 年 11 月に土田杏村草案の「信南自由大学趣旨書」が『南信新聞』に掲載されたが、「郡青と下伊那自由青年連盟から異論が出された」ため、自由青年連盟機関誌『第一線』第 5 号(1923 年 11 月 12 日)では、須山は「杏村の草案を一部改変し」て、「自由大学はプロレットカルトを骨子として、民衆教育機関として、経営して行く」と明記し、上田の信濃自由大学とは異なり、プロレットカルトを掲げていたこと、山本宣治と塩沢元二、土田杏村、須山賢逸、横田憲治との書簡のやり取りを紹介し、信南自由大学の創立が 23 年 12 月 15 日であったことや山宣との開講期日の日程調整が須山を窓口に行われたことを明

らかにした。また、24 年 3 月の LYL 検挙事件後、須山は山宣宛の書簡で自由大学は教育面、自由青年連盟は宣伝（運動）面と、教育と宣伝との区別がついたことを書き送り、須山は「自由大学を政治的運動とはあくまでも切り離して考えていたこと」を指摘している。

「おわりに」では、自由大学が「官に組することを拒否する思想や組織原則をもっていた」という小平氏によって押された「烙印」が、「神職合議所の保存運動に影響を及ぼさなかったといえるのか。当時の官権との対決姿勢を鮮明に打ち出す急進派であるかのような印象はそう簡単に覆せない」とし、「今後も地道な論考の積み重ね、またそれをまつほかはない。それも改めて、崇高な理念に対する再評価へと繋がろうとするものでなければならない」と述べている。

この伊藤論文は、約 20 年前の 3 つの論文を再構成してまとめたものである。したがって、既出の 3 つの論文を読んでいるものにとっては、新たな発見はなかったと言える。

私は、自由大学運動の研究史をまとめたが、その中で 3 つの論文について、次のように紹介した。

「2000 年代に入ると伊那自由大学に関する新たな資料が発掘され、伊那自由大学の運営の状況や、自由大学と社会主義青年運動との関係などについて、伊藤友久、清水迪夫が研究を発展させた。

伊藤は、伊那自由大学の発起人の一人である須山賢逸のもとに残されていた書簡と既出の史料をもとに、須山にが関わった自由大学、下伊那郡青の動きを再構成した。

「須山賢逸の関連史料－信南自由大学発起人と画家石井柏亭との接点－」（『信濃』第 53 巻第 2 号、2001 年）では、須山の弟で画家の須山計一を介して接点を持った石井柏亭の、46 年 1 月に賢逸が死去したときのお悔やみ状が紹介されているが、自由大学の発起人となった須山賢逸とその家族の状況が明らかにされている。「須山賢逸の関連史料（2）－信南自由大学の創立と理念－」（『信濃』第 53 巻第 9 号、2001 年）では、須山宛の山本宣治書簡と電報を紹介しており、自由大学開講直前の状況がより詳細に明らかになった。「須山賢逸の関連史料（3）－郡青から信南自由大学へ、そして信濃自由大学との係わり－」（『信濃』第 55 巻第 7 号、2003 年）では、須山が下伊那郡青委員長時代に郡青や鼎村青主催の講演会に講師として招請した永井柳太郎と藤森成吉の葉書を紹介し、当時の地域青年の動向や須山が自由大学を創立させた背景を明らかにし、自由大学は、青年会の自主化の動きの中であって、「民衆による自由教育機関の創立は必要不可欠との認識に至ったから」であり、来たるべき普通選挙実施に備え、特に新たな有権者、すなわち労働者階級や農民層が時勢に左右されず、自身の考えのもと判断を下せるように、「精神能力と教養」を青年期から備える必要性を感じていたからであると指摘している。」（拙稿「自由大学運動研究の軌跡」2021 年、<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~takakuraterukenkyu/jiyudaigakukenyunokiseki.pdf>）

まず第 1 に指摘しておきたいのは、既に 20 年前に「新史料」として紹介しているものを改めて「新史料」として 1923 年 11 月 29 日付の「山本宣治より須山賢逸宛書簡」を紹介していることである。これは「既出史料」であって、史料紹介のあり方として問題といわざるをえない。

第 2 に、小平千文論文が、自由大学は「官に藺することを拒否する思想や組織原則をもっていた」という指摘に対して、伊藤氏が「不名誉な烙印」を自由大学に押した、と批判していることについてである。小平氏が、自由大学が「官に組することを拒否する思想や組織原則をもっていた」と指摘したのは、自由大学の「趣旨書」の根柢に流れている、土田杏村が「国家の教権」からの自律を説いていたこと（「プロレットカルト論」『中央公論』第 7 号、1923 年）や、文部省の成人教育講座に対して「我々は断じて成人教育を文部省や内務省の手に渡してはならない」と批判していたこと（「自由大学の危機」『自由大学雑誌』第 1 巻第 2 号、1925 年）、また、自由大学は「経費の全部を会員の持ち寄る小額の会費によって支弁するのを原則」としていたが（猪坂直一「上田自由大学の回顧（一）」『自由大学雑誌』第 1 巻第 1 号、1925 年）、この原則は、自由大学が他のいかなる団体からも干渉をされず、独立した教育機関として活動するための必要条件であったことなどを念頭に置き、そのように書かれたものと思われる。小平氏が、信濃自由大学及び信南自由大学の趣旨書には「官権との対決を想定した過激思想や組織原則が持ち込まれ」ていた、と書いているならばわかるが、そのようなことはどこにも書かれていない。それを自由大学に「烙印」を押したなどという批判を浴びせることは、きわめて問題のある批判の仕方だと言わざるをえない。伊藤氏の立場に立つならば、自由大学は「官」の側に立って評価されなくてはならないということになる。これまでの自由大学研究を真つ向から否定する見解をあきらかにしたことになる。そして、伊藤氏は、論文の「おわりに」で、もう一度小平氏の指摘

を持ち出し、信濃自由大学 開講時の会場であった「神職合議所の保存運動に影響を及ぼさなかったといえるか」と、あたかも神職合議所が 1998 年に取り壊されてしまったのは小平論文に責任があるような書き方をされているが、これも問題である。神職合議所が取り壊された当時、私は、中央大学の兼任講師をしていて、毎年 8 月に研修旅行を実施し学生を引率して、別所温泉の山宣記念碑、山本鼎記念館、神職合議所、上田市立図書館、長野県立歴史館を訪れていた。前年まで神職合議所を訪れて学生に説明していたのに、1999 年に訪れた時には神職合議所は跡形もなく消滅していて、ぼう然とした記憶がある。神職合議所が取り壊されるという話は聞いていなかったし、市民による保存運動があったのかどうかは東京まで届いていなかったが、上田自由大学の意義が広く市民にも、また上田市ないし教育委員会にも理解されていなかったことが、建物の老朽化ということだけで取り壊されることになった要因だと考えている。自由大学運動の研究者として、また、1981 年に自由大学運動 60 周年記念集会上田市で開催した当事者として、いかに非力であったかを痛感している。小平論文が保存運動に影響を与えたとは考えられない。

第 3 に、上田自由大学と信濃黎明会との関係について、伊藤氏が、「信濃自由大学は信濃黎明会との共存の道を選んだ」ととらえ、このことが「信濃黎明会が信濃自由大学創立の母体との判断材料をとされた。そして、すべての自由大学は反体制組織を形成し、その思想を広めることで、やがては現体制転覆を謀る一翼を担う反乱分子の育成を目的に創立したとの解釈を甘んじて受けるに至った」と評価していることである。上田自由大学については、信濃黎明会の中心メンバーであった猪坂直一や山越脩蔵が、自由大学の創設に主導的な役割を果たしたことは事実である。そして、信濃黎明会の主要なメンバーの多くが自由大学の聴講者や「自由大学雑誌」の購読者になっていた。したがって、そのことを指して信濃自由大学と信濃黎明会が「共存」していたというのであれば、それは事実であるが、自由大学が組織として信濃黎明会と「共存の道を選んだ」わけではない。また、このことが「信濃黎明会が信濃自由大学の創立母体との判断材料にされた」とのべているが、これは当時の上田・小県地域の人たちの多くが、自由大学の創立母体は信濃黎明会だ、と判断していたという意味なのか。もしそうであるならば、その出典を示すべきであろう。自由大学運動が本格的に研究される前には、猪坂直一の『回想・枯れた二枝』(1967 年)に依拠して、たとえば『上田近代史』(1970 年)が「黎明会修養部メンバーから上田自由大学が誕生したのである」と、また『長野県政史』第 2 巻(1972 年)が「信濃黎明会修養部が発展した独自の教養機関であった」と記述したように、信濃黎明会が自由大学の設立母体であるかのように解釈されていた時期もあったが、その後の研究の進展で信濃黎明会が自由大学の設立母体であったとする研究はほぼなくなった。さらに、「すべての自由大学は反体制組織を形成し、その思想を広めることで、やがては現体制転覆を謀る一翼を担う反乱分子の育成を目的に創立したとの解釈を甘んじて受けるに至った」と書かれているが、これは、当時の自由大学関係者が「現体制転覆を謀る一翼を担う反乱分子の育成を目的に創立したとの解釈を甘んじて受け」ていたというのであれば、その出典を示すべきであろう。当時、自由大学が「反体制組織を形成し、その思想を広めることで、やがては現体制転覆を謀る一翼を担う反乱分子の育成を目的に創立した」ものだと評価されていたことは私は寡聞にして知らない。研究者の中で、自由大学を「現体制転覆を謀る一翼を担う反乱分子の育成を目的に創立した」ととらえる研究論文も知られていない。なお、信濃黎明会については、社会主義団体とは無縁であったにも関わらず、官憲当局からは 要注意団体としてマークされたことは事実であるが(内務省警保局「思想団体表」1921 年 4 月 15 日調、社会文庫編『大正期思想団体視察人報告』1965 年)、1923 年 9 月の県議選で沓掛正一を擁立したころから政治団体色をつよめ、24 年 5 月の総選挙で深井功を擁立し、信濃革正党に再編成されて以降、29 年には革正党の主流は民政党に吸収されていくのであって(拙稿「大正デモクラシー期における青年党類似団体の動向－信濃黎明会の活動を中心に－」『自由大学研究』第 9 号、1986 年)、信濃黎明会は「反体制組織」ではなかったことを指摘しておく。

第 4 に、伊藤氏は、信南自由大学の聴講者数が減少していった要因について、「横田憲治と平沢桂二は LYL を脱退したが、下伊那自由青年連盟は依然として信南自由大学に協力する立場にあったことなど、負の要因が存在した。それにもましてプロレットカルトを掲げた『信南自由大学趣旨書』の理念に原因はありはしないか」と述べて、自由青年連盟が自由大学に協力する立場をとっていたこととプロレットカルトを掲げた自由大学の理念そのものにあったことをあげている。自由青年連盟は当初、自由大学に好意的な立場をとっていたが、山本宣治の講座でさえ自由青年連盟会員の聴講者はそれほど多くはなかった。また、LYL 検挙事件後の政治研究会下伊那支部も、自由大学に期待を持っていた

反面、『自由大学とは何か』を出して社会主義青年運動との絶縁を表明したことに対しては厳しい批判を加えている。社会主義青年運動の側は好意的立場をとったとはいえ、全面的な支援をしたわけではなかった。伊藤氏は、自由青年連盟が自由大学に協力する立場をとったことを「負の要因」、つまり自由大学にとってマイナスであり、聴講者が集まらなかった要因の1つにあげているが、そうであるならば、山本宣治の講座に73名ないし57名と多くの聴講者があったことの説明がつかない。佐々木敏二氏は『長野県下伊那郡社会主義運動史』(1978年)の中で、自由大学がLYL検挙事件後「右旋回をはじめ」、社会主義青年ら「現地の要望に合致した講座が実現されず自由大学は次第に少人数の学習会へと変質して行った」と、伊藤氏とは反対に、自由青年連盟や政研下伊那支部らの青年たちの要求に応えなかったことが聴講者の減少をもたらした要因としている。私は、「自由青年連盟が協力的な立場をとったから聴講者の減少を来した」というより、聴講者の減少にはLYL検挙事件が青年たちに与えた影響が大きく、また社会主義青年運動の側とも疎遠の状況をつくったことが影響していると考えている。さらに伊藤氏は、聴講者減少の大きな要因としてプロレットカルトを掲げた自由大学の理念そのものにあったと指摘している。当時、土田杏村は、『信南自由大学趣意書』の中で「設立の趣旨」を執筆しているが、「プロレットカルト」の文言は使われていないものの、「教育と宣伝」を峻別する土田独自のプロレットカルト論にもとづいて書いている。しかも伊藤氏自身、「杏村は、自由大学こそプロレットカルトの場と考える」と書かれている。そうであるならば、「創設当時の理念を一から再認識」したとしても、プロレットカルトを掲げた自由大学の理念そのものが「負の要因」とであると評価する伊藤氏にとって、伊那自由大学の歴史的意義を考えることができるのか、疑問を禁じえない。

第5に、伊藤氏は、「おわりに」で「自由大学創立の理念を一から再認識」し、自由大学の「崇高な理念」を再評価すべきだことを説かれているが、伊藤氏自身は、信南自由大学については土田杏村の「設立の趣旨」を引用し、須山賢逸が土田の草案を一部改変したことを指摘して、「信南自由大学は、上田の信濃自由大学とは異なり、創立からはっきりとしたプロレットカルトを掲げ」ていたことは述べられているものの、信濃自由大学はどのような「趣意書」を掲げ、土田杏村がどのような自由大学の理念を説いていたかは明らかにされていない。したがって、信濃自由大学と信南自由大学とでは具体的にどのように設立の趣旨が異なるのかがよく理解できないし、その自由大学の「崇高な理念」を再評価することが必要であるとするならば、伊藤氏自身が先ず自由大学の「崇高な理念」をどのように理解しているのか、提示すべきであろう。

第6に、この伊藤論文は既出の3つの論文を再構成してまとめた論文であるが、1922年8月以降の信南自由大学(伊那自由大学)の創設過程、23年11月以降の第1回講座講師の山本宣治との交渉・日程調整、24年3月のLYL検挙事件に対する自由大学の対応と、時系列で叙述され分析されておらず、あちこち飛んでいるだけでなく、精査されていないために、同じことが別々の所で2回も論じられており、伊那自由大学の歴史に詳しくない読者にとっては、わかりにくい叙述になっていることである。たとえば、須山賢逸の役割を書いている39～40ページに、LYL検挙事件後の自由大学の対応について叙述したあとに、40ページに23年春の須山賢逸らの上田訪問、43ページからは22年8月の土田杏村の巡回講演と23年春の須山賢逸らの上田訪問が再び叙述されている。そして、そのあとは時系列に叙述され、「信南自由大学趣意書」の発表と須山賢逸によるプロレットカルトを掲げる改変、山本宣治との交渉・日程調整、山本宣治の「人生生物学」の開講状況が書かれ、50ページに再びLYL検挙事件後の自由大学の対応について書かれている。ここは時系列に沿って論文を構成した方がわかりやすいといえる。

第7に、史実の誤りや出典の誤り、誤植などが見られることである。

(1)「はじめに」の中で、信濃自由大学が1921年11月1日に開講された会場について、「小県郡神川村(現上田市横町)伊勢宮境内の神職合議所」としているが、「小県郡神川村」は誤りで、たんに「上田市横町の伊勢宮境内の神職合議所」でよい。

(2)1923年春に須山賢逸が信南自由大学の創立に先駆け上田の自由大学関係者を訪れたさい、「自由大学の趣旨に対する考え方の相違から激論になった」と指摘し、その出典として『上田近代史』をあげている。しかし、『上田近代史』の「上田自由大学」の項には、「LYLメンバーと信濃黎明会の会合が大正十二年一月にもたれたことは先に述べたが、数カ月後、飯田町の青年たちが猪坂を訪ね高倉に紹介されて、十二月に信南自由大学が生まれる」とあるだけで、激論があったというような史実は書かれていない。私も「激論になった」という史資料はもっていない。佐々木敏二氏も前掲著書では「激

論」に触れていない。「須山賢逸の関連史料（三）」の注（26）では、「この件に関する賢逸宛書簡類及び書類については別稿に譲りたい」と注記されているが、「激論」が事実であったとするならば、新しい史実の提示となるので、その史料を提示すべきであっただろう。また、このとき須山は、「高倉輝に接触。高倉から紹介されたのは、新明正道だった」と書かれているが、これは佐々木敏二氏の前掲著書に「猪坂直一談」として記述されたのが初出で、この出典を示さなかったのは問題である。なお、「山本宣治から小林多喜二へ―二人のプロレタリア運動家をつなぐある兄弟の人物史―」（『信濃』第 61 巻第 10 号、2009 年 10 月）では、「須山賢逸は、信南自由大学開設前に信濃自由大学の創設者へ会いに行き、その足で別所温泉に居住する上小農民組合連合会に所属する高倉輝へ相談。この時、信南自由大学の開講講師役に山本宣治を紹介される」とある。須山だけでなく横田も含めて上田の自由大学関係者を訪れたのは 11 月初旬のことだと考えられるが、この当時、タカクラ・テルは上小農民組合連合会には所属していない。上小農民組合連合会が結成されるのは 1928 年 4 月である。タカクラを訪れた時、山本宣治を紹介されたとあるが、その出典は示されていない。ところが、「小林多喜二と自由大学―プロレタリア作家が会った自由大学関係者―」（大槻宏樹・長島伸一・村田晶子編『自由大学運動の遺産と継承―90 周年記念集会の報告―』2012 年）では、「1923 年春、賢逸は横田憲治と平沢桂二の両氏とともに猪坂直一ら信濃自由大学(のちの上田自由大学)関係者宅に出向き信濃自由大学創設経緯や趣旨などを聞き、信南自由大学構想を話す中で高倉輝からは関西在住の山本宣治を講師役に紹介された」とあり、1923 年春に上田の自由大学関係者を訪れた時にタカクラが紹介したのは新明正道ではなく山本宣治になっている。タカクラが講師を紹介したのは、1923 年春の時は新明正道で、秋の時は山本宣治だったのか、それとも春の時に山本宣治だったのか、伊藤氏の論文を読んでいると事実関係が解らなくなる。その出典も示されていないので、尚更と言わざるをえない。

(3)信南自由大学創設の機縁となった 1922 年 8 月の土田杏村の巡回講演会について、伊藤氏は、「下伊那文化会」の主催であるとし、「杏村は、壇上で上田に開講した信濃自由大学に触れている」と書かれている。「須山賢逸の関連史料」では、土田は下伊那文化会主催の地元巡回講演会に講師を務め、「その講義の中で、プロレットカルトを目指した信濃自由大学の設立経緯について触れている」と、より具体的に講義内容が書かれている。この上田杏村の巡回講演会について、清水迪夫氏は「下伊那郡青の巡回講演会に招かれ来飯している」としており（「下伊那の青年たちが招いた講師―大正後期から昭和初期(一)―」『伊那』第 60 巻第 12 号、2012 年 12 月）、佐々木敏二氏も郡青主催としている。私も郡青主催としたが(拙編『伊那自由大学関係書簡』解説、1973 年)、郡青の主催であったと考えられる。また、土田が講演の中で、「信濃自由大学について触れている」と書かれているが、これが、伊藤氏の推測ではなく、史実であるのであれば、やはり出典をあげるべきであろう。

(4)44 ページに、土田杏村の「設立の趣旨」と須山賢逸がプロレットカルトを掲げた『第一線』に書いた「設立の主旨」との違いについて、須山の「真意は、前記の『一九二三年一月二十四日、須山賢逸(信南自由大学)より山本宣治宛書簡』から読み取れる」とあるが、その「前記」の須山賢逸の書簡はどこにも引用されていない。須山の「真意」がわかる書簡だけに、44 ページに引用しておくべきだったと思われる。

(5)1929 年創刊の伊那自由大学機関誌を『伊那自由大学』としているが、『伊那自由大学』の誤りである。

(6)注(25)に「注意喚起」として、自由大学研究会の著作物の誤植について注記がされている。事例として「別冊 2 の二四二頁掲載写真(大正一一年下伊那郡青年会の招待で)のキャプションは明らかに誤りである」があげられている。しかし、『自由大学研究』別冊 2 (1981 年)には「242 頁」はなく、これは『自由大学運動と現代』(1983 年)の「242 頁」掲載の写真のことと思われ、ここに掲載されている写真のキャプションは確かに誤りがある。『自由大学運動と現代』の編集作業は当時名古屋大学におられた小川利夫先生もとで行われていたとはいえ、誤りを見過ごしたことは編集責任者として謝らなければならない。『自由大学研究』別冊 2 の 37 ページの同じ写真のキャプションが正しい。これは、『自由大学研究』第 5 号(1978 年)で伊那自由大学の特集を組んだときに、福元多世さんから写真と説明が送られてきたので、51 ページに掲載したところ、後日、「土田先生の写真で、先生の側に座っておられる和服の方山田阿水と書きましたが、これは全くの見当外れでございましたので、どうか、これを山田阿水として下さいませ」と葉書で送られてきたので、『自由大学研究通信』第 1 号(1979 年)に掲載した「正誤表」では「51 下写 山田阿水 削除」とした。そして自由大学運動 60 周年記念誌である『自由大学研究』別冊 2 では、「正誤表」をもとにキャプションを直している。伊藤氏から誤植を指摘していただいたことは感謝するが、そこに誤植があつては、読者は『自由大学研究』別冊 2 を見

ても、戸惑うことであろう。また、誤植を指摘するのであれば、正しいキャプションを注記してもよかったのではないかと思われる。

伊藤論文の内容とその問題点を述べてきた。上田自由大学 100 年の節目の年に発表された論文なので、これまでの自由大学運動研究に新たな知見を見出すことを期待して読んだのであるが、残念ながらその期待に応えるようなものではなかった。伊藤氏にはやや厳しい指摘をしたが、お許し願いたい。

(2021 年 9 月 30 日脱稿)

注；本文中の拙稿「自由大学運動研究の軌跡」は現在、当該ホームページには掲載されていないので、拙著『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』（自由大学研究・資料室、2023 年）の第 8 章「自由大学運動研究の軌跡」を参照のこと。(2025 年 12 月 3 日追記)